

ばんけい

教育ほんといっしょ

かわら版

こ みち
教育の小径

No.148

2021 February

2月号



(一財)総合初等教育研究所参与

北 俊夫先生

今月のことば

どんぐり せいこう
団栗の背比べ

団栗の実は形や大きさがほぼ同じであることから、どれもこれも似たり寄ったりで特に優れたものや大きな違いがないことを言います。「背比べ」とも書きます。

ぶれない教育理念をもとう

- 戦後の学校教育を振り返ると、教育理念が時計の振り子のように、AとBのあいだを右に左にぶれながら展開してきた印象が拭えません。
- 「AかBか」の二項対立として捉えるのではなく、バランスと調和のあるぶれない教育理念をもって日々の教育実践を展開したいものです。

今月の 月光仮面の日
記念日 (2月24日)

昭和33年(1958年)のこの日、ラジオ東京(現在のTBSテレビ)で国産初の連続テレビ映画「月光仮面」が始まったことにちなんでいます。

戦後の教育実践から学ぶ

戦後、新しい学校制度がスタートした頃は子どもの生活経験を重視し、個性尊重と自発性にもとづく授業が展開されました。その後、学習のはい回りや子どもの学力低下が指摘されるようになりました。これを受け、各教科で系統的な学習が重視され、基礎・基本が徹底されるようになります。児童中心主義から、学習内容の定着を重視する系統主義へ転換されたのです。

この考え方は昭和43年の学習指導要領に引き継がれ、その後教師による知識の詰め込みや指導内容の高度化に伴う、落ちこぼしの問題が顕在化してきました。昭和52年の改訂では、「ゆとりと充実」のキャッチフレーズのもと、基礎・基本を徹底し、個性に応じた指導が充実されるようになりました。

平成10年(1998年)改訂の学習指導要領では、子どもの活動や体験を重視する「総合的な学習の時間」が創設されました。多くの学校では、総合的な学習の指導に多くのエネルギーを割くようになります。子どもが楽しく学習活動に取り組む姿が見られるようになりました。しかし、指導内容や授業時数が削減されたため、学力低下を懸念する指摘が出され、教科指導の充実に目

を向けるようになりました。

近年では、アクティブ・ラーニングが話題になった頃、学校現場の関心は一時学習をアクティブにすることに関心が向きました。そこで、ラーニングとして成立させる趣旨から、「主体的・対話的で深い学び」を実現することの大切さが改めて強調されました。

戦後の教育実践を大まかに振り返ってみると、その時々々の学習指導要領において強調された課題を受けて、学校の教育実践が揺さぶられてきた印象を強く受けます。

このことを図式的に表すと、Aという課題が提起されると、学校はAの課題解決に向かって努力します。しかしそのうち、Bは大丈夫かと指摘され、学校はその後Bの課題にも取り組まなければなりません。学校教育が時計の振り子のように、右に左に大きくぶれながら展開されてきました。

バランスのある教育実践を

「AかBか」「AではなくBを」といったように、2つの教育課題を二項対立の関係として捉えがちです。ところが、教育活動という営みは、対立や矛盾の関係にあるものは少なく、単純に一方だけを選択したり消去したりすることはできません。

教育には教えることと育てることの2つがあります。子どもの主体性を尊重しつつ、教師は適切に指導することが求められます。子どもの個性を重視することは大切ですが、社会人として成長させるためには、違えること(一人一人のよさを伸ばすこと)と揃えること(最低限の基礎・基本を習得させること)の両者が必要です。

子どもを育てる基本理念は、「AかBか」ではなく「AとB」の両者をバランスよく取り入れることです。「or」ではなく「and」です。

「子どもに確かな学力を」と言われると、学力向上のみに関心が向きがちですが、人間として成長していくためには知育とともに、徳育も体育も大切です。知・徳・体の調和のとれた人間形成が求められます。

今回の学習指導要領で重視されている「資質・能力」は、知識・技能だけでなく、思考力、判断力、表現力等の能力や学びに向かう力、人間性等を内容にしています。大きく捉えると、理解と能力と態度を統一的に育成することだと受けとめることができます。

新しい課題を受けとめるとともに、子どもの人間形成にとって何が必要なのかという原点に立って、常にバランスを保ち、ぶれない教育理念をもって教育実践を展開したいものです。

褒めると叱る

子どもを伸び伸び育てる鉄則のひとつに「褒めて育てる」ことがあげられています。褒められていやな気持ちになる人はだれ一人いないでしょう。

ただ、褒められてもそのことを実感できない場合があります。例えば縄跳びの二重跳びが以前から跳べる子どもが、「上手に跳べるね。よく頑張ったよ」と褒められても、それほど嬉しく思いません。それは自分が評価していることとのズレがあるからです。頑張った事実がないのに褒められているからです。3回しか跳べなかった子どもが5回跳べるようになったとき、「回数が増えたね。よく頑張ったよ」と言えば、子どもの気持ちは違います。

子どもを褒めるポイントは、進歩の状況や努力の様子を時間軸で捉えることです。時間軸とはこれまでと比べていまの状況を捉えることです。このことによって子どもの何を褒めるのかが明確になってきます。進歩した事実がないところで、「よく頑張ったね」と言われても、子どもはその言葉を正直に受け入れてはくれません。

叱るという行為があります。これは子どもの課題や問題点を戒めることです。感情が先行する怒るとは意味合いが違います。

望ましくない行為や状況を決して褒めてはいけません。正当化してしまうからです。そのような場面ではいきなり叱るのではなく、何が問題なのか。なぜ問題になっているのか。これからどうしたらよいのかを子どもに考えさせるようにします。これは子ども自身が自らの行為を戒めることです。子どもに改善策を考えさせ、自ら成長させようとする意識を養います。

教育の動向

国語に関する世論調査

文化庁は「国語に関する世論調査」の結果を公表しました。これは現在の社会状況の変化に伴う日本人の国語に関する意識と理解の現状について調査したものです。対象は16歳以上の男女で、調査の時期は令和2年の2～3月でした。主な結果を紹介します。

「国語が乱れていると思うか」という問いについて、「非常に乱れていると思う」と回答した人の割合が10.5%、「ある程度乱れていると思う」が5.6%で、合わせて16.1%でした。平成11年度調査では8.8%でしたから、減少傾向にあることがわかりま

した。40歳代から50歳代では7割を超えていました。

「乱れている」と答えた人にどのような点で乱れていると思うかを尋ねたところ、「敬語の使い方」(63.4%)と「若者言葉」(61.3%)が高い割合でした。

慣用句である「浮足立つ」を「喜びや期待を感じ、落ち着かずそわそわしている」と誤った理解をしている人の割合は60.1%でした。本来は「恐れや不安を感じ、落ち着かずそわそわしている」ことです。

言葉遣いなど言語文化は時代とともに変化していくものですが、基本となることや本来の意味については、国語科の時間を中心に日常生活のなかでしっかり身につけさせたいものです。

北 俊夫の「実践と研究」の足あと 16

教職10年目の実践

私が教職10年目を迎えたのは昭和54年度。3校目に異動した年です。昭和53年版学習指導要領への移行1年目でした。5年の学級担任になった4月、「教職10年目の実践」を冊子にまとめようと決心したのです。そのためには、これまで以上に計画的に実践し、実践の記録を残し、授業記録と子どものノートなどをもとに実践を分析することが求められました。

実践した単元は、「魚を生産する地域とその人間」「産業の発達と公害」「和紙づくりのふるさと」「国土の地理的なはたらき」の4つでした。水産業の実践は水産資源を持続的に確保する工夫を取り上げたものでした。和紙づくりの実践は、学習指導要領に伝統的な技術を生かした産業として新たに追加された

内容でした。国土に関する学習では、理科の内容とも関連付け、わが国の国土には本来自然浄化能力があることを扱ったものでした。

4つの実践は『ひとりひとりの子どもを主人公にした社会科学習をもとめて一子どもと教師による手づくりの実践一』として、全体で126ページのタイプ印刷の冊子にまとめました。費用はすべて自費でした。

冊子には当時の校長から「よい指導者や仲間に恵まれたこと、あくなき研究意欲、絶えざる先見性を持った研究実践、一人一人を愛する児童愛、謙虚な反省を綴った貴重な記録の作成等、日頃の努力の賜物」と、望外の巻頭言をいただきました。冊子は校内の先生方をはじめ、それまでにお世話になった方々にお配りしました。改めて指導を受ける機会になりました。

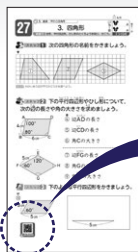
INFORMATION

ぶんけいの「GIGAスクール構想」対応企画!



紙面のQRコードを読み取って、簡単アクセス!

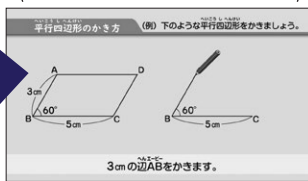
*QRコードの商標は(株)デンソーウェブの登録商標です。



算数教材搭載QRコード

- ◆くりかえし計算ドリル
- ◆計算スキルアップ
- ◆算数ドリル

アニメーションで図形のかきかたを分かりやすく確認できる!



編集後記

2021年度を目前に控え、いよいよ「GIGAスクール構想」の実現が間近となってきました。ICTを活用した授業実践などが活発になっている学校現場において、文溪堂の「GIGAスクール構想」対応コンテンツである「ちょこっとデジタル」をぜひご活用いただけたら幸いです。(F記)

企画・編集：ぶんけい教育研究所
発行：株式会社文溪堂
発行日：2021年2月1日